慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	M·エルナンデス·サンチェス＝バルバ著；西俣昭雄, 石井陽一共訳『イスパノ·アメリカ』：二〇世紀の歴史的緊張
Sub Title	M.H. Sanchez-Barba : Las tensiones historicas Hispanoamericas en el siglo xx, 1963
Author	賀川, 俊彦(Kagawa, Toshihiko)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1966
Jtitle	法學研究：法律· 政治· 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.39, No.2 (1966. 2) ,p.110- 114
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19660215-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Mario Hernández Sánchez-Barba: Las Tensiones Historicas Hispanoamericas en el Siglo XX

Ediciones Guadarrama, Madrid, 1963.

M・エルナンデス・サンチェス＝バルバ著
西俣昭雄／石井陽一　共訳

『イスパノ・アメリカ』
——二〇世紀の歴史的緊張——

一　ラテン・アメリカ二〇ヵ国中、ポルトガル系のブラジルとフランス系のハイチとを除けば、他の一八ヵ国はすべてスペイン系諸国であり「イスパノ・アメリカ」と呼ばれる。領土面積からすれば、ブラジルがラテン・アメリカの五分の二を占め、残る五分の三がだいたいイスパノ・アメリカということになる。

マドリッド大学のマリオ・エルナンデス・サンチェス＝バルバ（Mario Hernández Sánchez-Barba）教授による本書、正式には「二〇世紀におけるイスパノ・アメリカの歴史的緊張」（Las Tensiones Historicas Hispanoamericas en el Siglo XX, Ediciones Guadarrama, Madrid, 1963.）は、かつてはその母国であり、今日なお文化的精神的に密接不可分な関係にあるスペインの立場から、イスパノ・アメリカ観を打ち出したものの代表的作品である。従来、ラテン・アメリカ研究はもっぱら米国の独壇場であり、昨今漸く英国、フランス、ソ連での研究が目立ちはじめているが、当然あって然るべきスペインあるいはポルトガル側からの視角に欠けていたことに少なからぬ空虚さが感じられていた。このようなときに、実存主義哲学を受け継ぎながら独特の信念を保ち続け、二〇世紀精神文化の危機を強調するスペイン歴史哲学の伝統的な所産として本書が世に出されたことは、世界のラテン・アメリカ研究の渇を癒すのみならず、それぞれの現代史研究の方向についても多大の反省を促すものであろう。本書の邦訳出版がなされたことを心から歓迎したい。

二　本書の構成は次の七章からなる。

第一章　イスパノ・アメリカの現代的状況
第二章　新しい思想運動と中産階層の出現
第三章　政治形態——独裁制と民主制
第四章　哲学・文学および世論
第五章　イスパノ・アメリカ諸国とアメリカ合衆国
第六章　ペロニズムの歴史的意義
第七章　フィデル・カストロでの経験と実験

その構成内容の概況をみると、第一章は「イスパノ・アメリカの現代的状況」を把握するための問題提起、ならびにその状況内容に

関する総括である。状況内容は、第二章以下の各章に受け継がれ、それぞれ社会的・思想的・政治的な各方面における問題の展開となつて論議されているが、それらの帰結はすでに第一章において充分な暗示となつてあらわされている。そこで、本書をより容易に理解するためには、むしろ第二章以下の状況内容を知るのが先決であると思われるので、あらかじめそれらを略述しておきたい。

第二章の「新しい思想運動と中産階層の出現」では、イスパノ・アメリカ諸国における独立運動以前の社会思想から説き起し、「スペイン的な機構の中で重要な社会的歯車」であつた「クリオーリョ思想」の功罪を論ずる一方、土地貴族を中心とする寡頭政治が「外見的には民主的諸制度を採用しながらも、……ときにはさらに確実に自己の固有にして私的な利益に仕向けられた政府形態を画策するにまでいたつた」過程が詳述される。結局、国家的利益を犠牲にしてまで、外国資本と安易に結んで個人的利益をむさぼつた買弁的ブルジョアジーが、イスパノ・アメリカ経済の現実を塗炭の苦しみに陥れることになつたのだが、このようにまつたく搾取的な植民地経済方式がかえつて労働者階級に攻撃的革命的ナショナリズムを植えつけることになつた。共産主義やアプラ主義などの新思潮の洗礼を受けてますます尖鋭化しつつある新興の中産階層は、いまやイスパノ・アメリカを決定的段階に追い込んでいるのだが、その解決策の源泉としてメキシコ革命にその示唆を求めるのである。

第三章の「政治形態——独裁制と民主制」では、まず政治秩序に関する理論的視界を展望し、イスパノ・アメリカの政治的現実が「きわめて理解し難い政治秩序の恒常的変遷」を特性としていることを指摘しつゝも、「第三の道」を求める民主化運動が新しい政治的秩序の確立を求めて動きはじめたことを具体的に画いている。ヴェネズェラではロムロ・ガリェーゴス (Rómulo Gallegos) とロムロ・ベタンクール (Rómulo Betancourt) の登場を、ペルーではアヤ・デ・ラ・トーレ (Haya de la Torre) とアプラ党 (APRA=Alianza Popular Revolucionaria Americana) の抬頭を、またボリビアでは国民革命運動 (MNR=Movimiento Nacionalista Revolucionario) の勝利を、以上三ヵ国の実例をもつて「第三の道」の輪郭、指導原理、傾向を鑑識する材料として挙げている。民主的な性格と当該国の現実に深く根ざした新興政党による政治秩序、こうしたところに「第三の道」の前提条件が求められよう。

第四章の「哲学・文学および世論」では、イスパノ・アメリカの根深い社会運動との関連において、哲学の創造的価値、文学の動きとその価値を論ずる。哲学や文学は感覚的な立場から過去を現実化して示し、これを一定の理想的な目的を通じて未来の計画に役立たしめようとする。一定の理想的な目的、それは前章において示された「第三の道」に連なるものである。

第五章の「イスパノ・アメリカ諸国とアメリカ合衆国」は、両者の植民地時代のあり方にすでに経済的、社会的、思想的、文化的な根本的相違があつたことに問題を掘り下げることによつて、二つの世界に横たわる異なつたものの考え方、諸々の姿勢を追求する。要するに、両者はすでに植民地時代からイスパノ・アメリカの消極的

社会とアングロサクソン・アメリカの積極的社会の相違があり、これが一方では国家中心主義、他方は拡張主義へと進展したのであつて、お互いに異なつた思想や傾向の動きが国際的にまちまちの動きを示すことになつた。すなわち、イスパノ・アメリカ主義、汎アメリカ主義、それに総体的な全アメリカ大陸主義などの存在がその事実を率直に示しているが、ここでは、唯一の継続可能性あるイベロ・アメリカ主義の傾向がすでに終りを告げたとみなされうる現在、この問題を締括る解答は明確化されていない。

第六章の「ペロニズムの歴史的意義」と第七章の「フィデル・カストロでの経験と実験」とは、第三章で論及されたイスパノ・アメリカの「政治秩序の恒常的変遷」過程におけるそれぞれ特殊な形式であるという視野のもとに捉えられている。ペロニズムに関しては、それが共産主義的帝国主義を防止することを目的としていたことに至大の重要な意義を認め、キューバに関してはカストロが共産主義者でなかつたにもかかわらず共産陣営に走つた経緯を正当・非正当的要因の両面から論及するのであるが、いずれにせよ、これらはそれぞれ内部的には革命的な実験（experimento）であつても、外部的には一つの経験（experiencia）という意味の枠を越えるものではない、とする。イスパノ・アメリカの現実からまつたく隔絶したこれら二つの貴重な経験は、しかしながらイスパノ・アメリカの現実に即応する「第三の道」を発見する緊急の必要性があることを示唆して余りある、と結んでいる。

三　紹介の順序が前後したが、著者の第二章以下にみられる公正妥当にして明快な状況内容の把握は、いかなる問題提起の仕方に従つているものか、それを知るためにも再びはじめの部分に帰る必要がある。もつとも、この方法論の部分はきわめて難解であり、なまじいに手を下すことによつて、かえつて誤解を招く恐れがあるほどであるので、そこは原文に忠実に、しかも論旨の紹介にのみとどめたい。

はじめに、著者は、主題へのアプローチの方法として、スペイン哲学界の長老、ハヴィエル・スビリ（Xavier Zubili）が歴史哲学に寄与した「状況」（Situación）概念の紹介から出発しているのだが、そこに包含されている三つの要素、「視界」（horizonte）、「存在内容」（Contenido）、および「基礎」（fundamento）のもとに、現代イスパノ・アメリカの「状況」把握に努めようとすることを明らかにしている。

まず、「視界」とは「状況の中におかれた人間の体験を支配する範囲および限界を示す輪郭を指す」ものであつて、著者はこの「視界」の設定に世界的な「二〇世紀の危機」をもつてする。「二〇世紀の危機」とは、ヤスパースがいみじくも指摘したように、「現代の生活秩序のすべてに対する不信から、根本的に生じてくる無限の変化」のことである。

その最初の発現は第一次大戦であつて、世界的な統一性、社会的混乱の過程と符牒を合わせて世界的な同一化の過程が並行していたが、このことは、「個人の実体の喪失と、それに相応する個性の欠

如、さらに一九世紀を通じて自由な批判によつて清算された権威の欠如など、主な結果を生み出す規格化の方向へ押し流し」、同時に、「義務の忘却とあくなき権利の追求とが赴くところ、往々にしてアナーキスト的暴力に昂進し、これが人間的自由の完全喪失、基本的人権の侵害を派生する」という精神的危機を招来せしめた。このことは、さらに、「ロシア革命をしてその最初の実践とする社会革命は、共産主義の純理論によつて一段と助成され、それは資本家の行き過ぎと相俟つて暴力的精神の最大の推進役となつた」のである。このように、「視界」は「存在内容」――人の経験の中に入り込んでいる雑多な諸要素の総合=歴史――と不可分の形で捉えられている。

さて、第三の「基礎」は「視界」の基本原則であり、構成元素でもあるが、「思想、信仰などのように、状況そのものに対して原則としての力と最終的支柱を供与するすべてのもの」を指す。このような基礎を構成するものとして、著者はイスパノ・アメリカに内在する二つの事実、すなわち「経済的帝国主義」とこれに対抗する「革命的ナショナリズム」とを提示し、これら両者の宿命的な出合いから生ずる激しい緊張、予想される衝突の連鎖拡大を通じて、正しい視界のなかでイスパノ・アメリカの現代史における問題点のすべてを理解しようとする。このように実体的な基点に立つてこそ、はじめてイスパノ・アメリカの歴史的断面は奥行きと広がりを添えて一段と明らかになるのであり、二つの傾向の衝突がイスパノ・アメリカ人に一つの経験とそれにかかわる理念、さらに二〇世紀における歴史的行為の意義を賦与することになろう。

イスパノ・アメリカの現代的状況は、ここに設定された「基礎」からして、「経済的帝国主義」を代表する「米国の経済的膨脹過程」を明らかにするとともに、これに対比される「革命的ナショナリズム」の例を「一九一〇年メキシコ革命」にとる。ここで、著者の帝国主義観は、それが「領土的な膨脹よりも、商業的――というよりは、経済的――膨脹の必要性から生じた」という結果的な現象面からの定義を採用し、米国の帝国主義的な膨脹を事前に条件づけている一連の先行現象、すなわち商業資本主義、産業資本主義、金融資本主義、国家資本主義といつた時代別プロフィールを明らかならしめる。いわば、米帝国主義は資本主義経済の合理的膨脹の所産であつたとみるわけだが、ただし、いわゆる悪評高い「棍棒政策」や「ドル外交」の反省から、ルーズベルト大統領が一九三三年以来唱導した「善隣政策」をもつてそれらに代えようとしたときには、もはやイスパノ・アメリカの世論の中に深く根を下ろした米国への不信と疑惑の念を払拭するために遅すぎたばかりか、米国人自身に近隣諸国を尊重する気風を植えつけるためにも時期遅れとなつたことが、今日の危機を生む一大要因となつたとみるのである。

一方、これに対抗しようとするイスパノ・アメリカ諸国ナショナリズムの背景をなす要素としては、一九世紀の膨大な経済問題、社会的現実にそぐわない政治思想、不労所得階級の莫大な所得、それに一連の不均衡な政治情勢などが挙げられる。しかし、一九一〇年のメキシコ革命は、農地改革と石油産業国有化という二つの梃子を

使つて、ナショナリズムが内蔵している可能性について全米洲的スケールでの貴重な前例を開くことになつた。このメキシコ革命こそ、全米洲に対してラディカルな積極性ある先駆的な意義をもつものであり、アメリカ合衆国の経済的膨脹という歴史的事実に劣らぬウェイトを現代の世界史においても示すものである。

本書の第二章以下の状況内容を論及するにさいして、著者が再三にわたつて繰り返した「第三の道」は、じつにこのメキシコ革命という決定的事実にその至大な価値を見出しているからにほかならない。

四　本書がスペイン歴史哲学界を代表する秀れた著作であることについてはすでに定評があるが、確かにその緻密な論法といい、また事実認定の正確さといい、筆者のごとき浅学非才な者の批判を許さぬほどの厳しさが漲つている。このことはとかく安易な方向に走る傾向をもつ米国のラテン・アメリカ研究書とは、格段の差を示すところでもあろう。ただし、文体の流麗さ――それは訳者をさぞ困惑させたことであろうが――の故か、とかく難解な部分が多い。脚註が附せられていないのはどのような理由によるものか、研究書としては大きなマイナスである。

最後に翻訳について一言すると、本書が全体的に難解なことは重々察しうるところであるが、原文に忠実を期したことがかえつて難解さを増したのではあるまいか。脚註が欠けていることでもあり、プリミティヴな事項にのみ捉われぬ訳註の配慮が望ましかつた。また、単なるミス・プリントのみならず、欠漏があることは、せつかくの名著を扱うにしては疎漏の感を免れない。

とはいえ、わが国におけるラテン・アメリカ研究の現況を省るとき、訳者らが本書をはじめて邦訳の形で紹介し、この研究分野のために貢献した功績のほどはきわめて大きい。さきの暴言を謝して今後の精進を心から願うものである。

(賀川俊彦)

Rupert Emerson:

Political Modernization: The Single-Party System

A Publication of University of Denver, Monograph No. 1, 1963—64, 30 pp.

R・エマースン著

『政治的近代化と一党体制』

一　本書は標題の示すとおり、政治的近代化と一党体制の関係を論じた小冊子である。著者エマースンはハーバード大学教授（政治学）であり、主著としては From Empire to Nation: The Rise to Self-Assertion of Asian and African Peoples (Harverd University Press, 1960) がある。本書はもともと、一九六三年九月に開かれたデンバー大学社会科学研究所主催による新生諸国問題のセミナーにエマースン教授がペーパーとして提出したものを、後に同研究所が